

『土方久功日記』と中島敦についての回想文

跡見学園女子大学 非常勤講師
清水 久夫

はじめに

「山月記」で知られる中島敦は、昭和16年（1941）6月26日、雨の横浜港を出発し、7月6日、パラオに到着した。南洋庁国語教科書編修書記として、パラオのコロールにあった南洋庁総務部地方課に赴任するためであった。

土方久功^{ひさかつ}は、昭和4年（1929）3月、28歳の時にパラオへ渡り、その地に2年半滞在し、民族美術調査、民族学調査をした。その後、昭和6年（1931）11月に、ヤップ離島のサタワル島に渡り、7年余滞在し、その間、民族学調査を行い、美術作品を制作した。そして、昭和14年（1939）1月、再びパラオへ戻り、南洋庁地方課（後に、物品陳列所を兼務）嘱託となって、民族学調査、民族資料の収集をし、美術作品を制作した。そこで、中島敦と巡り会うことになった。

敦の名が初めて『土方久功日記』⁽¹⁾（以下、『日記』と略す）に見えるのは、パラオ到着10余日後の7月18日であった。この日の『日記』（V、367頁）に次のように書かれている。

朝、航空会社ノ中垣ト云フ人ガ物陳ニタヅネテクル。絵画同好会ヲ作ルコトニナツタノデ、今晚南賀デ集ルカラ来テクレトノ事。今日ハ中島君[文化協会]ガ編輯書記ノ中島君[敦]ヲツレテクルコトニナツテ居ルノデ断ル。夜、中島君[敦]ハ来ズ。

「物陳」とは、久功が勤務していた展示施設である。この日の夜、敦は、南洋文化協会の中島幹夫とともに、久功の官舎を訪れる事になっていたが、喘息のため訪れることができなかった。

敦はその後、アラバケツにある南進寮からコロール町の第5宿舎官舎に移ったが、7月末から8月の初めにかけて急性大腸カタル（実は、アメーバ赤痢）に罹り、誰も知人がいなかったため、腹痛と下痢の中、まる3日間炎熱に喘ぎながら、飲まず食わずで放置された。それが治らないうちにデング熱に罹ってしまい、39度の熱で床についた。

次に『日記』に敦の名が見えるのは、一月後の9月18日であった。その日の『日記』に、「夜、中島君（敦）来ル、Maria来ル。」と書かれている。久功は商工課と地方課とを兼務していたので、地方課に所属していた敦とは直に知り合うことになったが、久功の官舎を訪れたのは、この時が初めてと考えられる。この夜は、たまたまMaria（マリヤ）も訪れた。

敦の名が『日記』にしばしば見られるようになるのは、9月になってからである。9月9日には、夕食後、パラオ放送局の久保田公平とともに久功の官舎を訪れ、消灯時間までいた。その翌日には、久功と敦は、東京帝大教授の渡辺信一、久保田等とともに、近くのガルミツ（アルミツ）部落を訪れた。

その後、敦は病も癒え、公学校視察のため、9月15日からトラック（チューク）諸島を中心に、南洋群島を一周する2ヵ月にわたる長期の旅に出た。

敦が長期の出張から飛行機でパラオへ帰って来たのは、11月5日の午後であった。早速その夜、久功の官舎を訪れた。この出張で訪れた南洋群島は、7ヵ月前に久功が訪れた島々だったので、敦にはすぐにでも話したいことが沢山あったのであろう。

12月19日、敦は久功を訪れた。敦の『南洋の日記』には、久功の官舎で「南方離島記」の草稿を読んだことが書かれている。この頃になると、久功が敦に、草稿を自由に読ませる親密な関係になっていたことが分かる。

年が明け、帰国する2ヵ月半前の昭和17年（1942）1月17日から、敦は久功と2人でパラオ本島（バベルダオブ島）を一周する2週間の旅をした。敦は、この久功との旅を楽しみにしていた。そして、3月4日の朝、久功と敦は、久功が苦勞して手に入れた切符でサイパン丸に乗船し、17日の夕方、出迎えのない横浜港に到着した。二人は一緒に食事をした後、横浜で別れたが、たがいに住む家が近かったので、敦の死の直前まで、二人の交流は続いた⁽²⁾。

土方久功は、生前、中島敦について、4つの回想文を公表している。

1. 「トン」⁽³⁾
2. 「敦ちゃん」⁽⁴⁾
3. 「パラオでのトンと私」⁽⁵⁾
4. 「パラオでのトンちゃん」⁽⁶⁾

没後に公表された回想文は、次の2つである。

5. 「トン」⁽⁷⁾
6. 「トンちゃんとの旅」⁽⁸⁾

小稿では、これらの回想文がどのように書かれたかを、『日記』を使用して述べたい。

なお、「回想文」という言葉は、あまり使われないが、安川定男氏が、後述する「土方久功と中島敦」の中で使っているので、小稿でも「回想文」という用語を使った。

1. 二つの「トン」

土方久功には、「トン」と題した回想文が二つある。一つは、最初に発表された回想文、筑摩書房版『中島敦全集』第3巻付録「中島敦全集通信」第3号所収の「トン」であり、もう一つは、未発表原稿で、『土方久功著作集』第6巻に収められている「トン」である⁽⁹⁾。この両者の関係については、「日記」、昭和23年（1948）11月2日の記（第50冊、75頁）の記述が明らかにしている。次に引用する。

二日

朝、筑摩書房ノ石井 立ト云フ人ガ訪ネテ来ル。故 中島敦ノ全集第一巻ガ出タノデ持ッテ来テクレタノデアルガ、二三日 前 編輯委員会議ガアツタ時 ^{〔中島〕} たか子サンガ出テ来タサウデ、「全集通信」ニ何か書イテ貰ッたらヨカラウト云ハレタノデ 来タ 由。一寸長過ギルケレド適宜ニチヂメテ貰フコトニシテ、前ニ書イテアツタ随筆「トン」ヲ渡ス。

これによれば、久功は、この日訪ねて来た筑摩書房の石井立に「前ニ書イテアツタ随筆「トン」」の原稿を渡したのである。それを、筑摩書房の編集者が適宜に“縮めた”のである。題名は、原文と同じ「トン」である。

つまり、久功が筑摩書房の石井に渡した原稿は、未発表原稿として『著作集』第6巻に収められている「トン」であり、「中島敦全集通信」第3号に掲載された「トン」はそれを縮めたものである。両者を比べると、「全集通信」に掲載された随筆は、『著作集』掲載文の冒頭12行が削除され、途中3か所、それぞれ2行、2行、14行が削除され、最後の7行が削除されている。これで、「全集通信」掲載文は、およそ半分の長さになった。それで、削除に若干無理があったためか、「全集通信」に掲載された回想文には、つなかりの悪いところがみられる。

ところで、久功が「前ニ書イテアツタ随筆「トン」」は、どのようにして書かれたのであろうか。久功は、論文にしても、随筆にしても、ほとんどを「日記」を基にして書いている⁽¹⁰⁾。この随筆の基になったのは、香港の病院に入院中の昭和18年（1943）11月8日の「日記」に書いた「思い出」である。「日記」は、まだ、敦の逝去から一年も経っておらず、久功が「弟子」を読んだ直後に書かれたので、久功の敦への熱い思いが感じられる⁽¹¹⁾。以下、多少長いが未刊行の部分なので引用したい（第36冊74～80頁）。

八日 月 晴、無風、暑、夜一点ノ雲モナイ深イ空、明ルイ月。

体重 100ポンド。 軍医回診。 大詔奉戴日、勅諭奉読式。

古イ「中央公論」（二月号）ヲ借りテ来テ、見テキタラ、中島敦ノ「弟子」ト云フノガ出テ居タノデ、早速読ンダ。「トンヒュー」事、中島敦ハ、ソノ「ヒュー ヒュー」タル喘息デ死ンデシマッタノダガ。ソレモ 私ガ南方ニ出テ来ル直前ニ、ソノ逝去ヲ^死口ツテ、最後ノ死顔ニオ別レヲシテ来タノダッタガ。スルト此ノ遺稿——ニナツテシマッタ——ハ ソレカラ二ヶ月後ニ印刷サレ、発表サレタノダ。

本当ニ短カク「トン」トノ交遊。パラオデノホンノ幾月ト、パラオヲ引上ゲテカラノ東京デノ、コレモ唯何ヶ月ノ交ハリダッタ。シカモ其ノ短イ間ニ、「トン」ハ私ニハ、アノ、無クテハナラナイ筈ノ友達ニナツテキタノダッタ。ソシテ、コノ、何年ブリト云ハズ、何十年ブリデ得タ「トン」ヲ 私ハ直グニ失ツテシマッタ！

若イ時ノ、岡村三二郎ト、青木光ニト、ソレカラ アノ野間政治ト。コレラノ友達ガ アンナ風ニシテ死ンデシマハナクッタナラバ、私ハ今ノヤウナ私デハナクッタヤウニ、「トン」ガ死ンダ為ニ 又々私ノ一ツノ未来ガ 折リモガレタ事ヲ今更ノヤウニ思フ。

私ニ「流木」ヲ出サセタノハ「トン」ダッタト云ヘル。ソシテ「流木」ガ出タノハ「トン」ガ亡クナツテカラ半□年モノ後ダッタ。併シ「トン」ガ「流木」ノ原稿ダケデモ見テクレタ事デ 私ハ満足シナケレバナラナイ。

イロンナ「トン」ヲ思ヒ出ス。ヒドイ近眼鏡ノ奥ニ、笑フ消エテシマフ様ナ眼。ソノ眼鏡ノ眼ノ前ニ近タト本ヲ寄セテ、何かブツツ言ヒナガラ、本ノ頁ヲパラバト前ニカヘシ、後ニモドシ、ソレカラ其ノシグサノママデ、急ニ立チアガッテ、二室ブツトホシニ、アツチカラ、コッチヘ、コッチカラ、アツチヘト、ウツムキナガラ歩ク——其ノ額ニバサバサト垂レカケル頭ノ毛ヲ時々

無意味ニ手デカキアゲ、又ハ頭ヲ上ニアゲテ プルブルット振ッテ 頭ノ毛ヲ後ニナゲルノダガ、元ノ姿勢ニカヘルト一緒ニ頭ノ毛モ直グニ 前ノ如クバサバサト額ノ上ニ垂レ帰ルノダガ。ソシテ左ダカ 右ダカノ袂ガ、モウチギレトレンバカリニホコロビテ サガッテキルノヲ、コレモ全く無意味ニ肩ノ上ニタクシアゲルノダガ、全時ニコレモ亦、元ノ通りニ スグニブラサガル、ソノネマキノ後ノ方ハ 丁度背中ノ所ガ 一尺近くモ縦ニ裂ケテ居リ、立派デモナイ背中ガ黄色クハミ出シテ居ルト云フ風ダ。ソノ腋カラモ背中カラモ 充分ニ風ノ通ル著物ヲ、暑イ暑イト云ッテ、ヨレヨレノ帯ト一緒ニカナグリ捨テルト、白イ ブカブカノサルマタハ、大キナホコロビヲ黒イ糸デ、ブキツチョニ、巻キ縫ヒニ、カガッテアルト云フ シロモノデアル。ソレガ一朝雨が降ッタリスルト、今度ハ南洋ノパラオデハ見カケルコトモナイ、毛ノ長袖ノシャツ、全ジ長イ モモヒキヲ二枚モカサネテ着テ、ヒュー ヒュー ト喉ヲナラセ、“ヤッテキヤガッタ”ト云ヒナガラ白イ錠剤ヲ ニツニ折ッテハ飲ムノダ。アハレデアル。暫ク見エナイト思ッテ 独身官舎ノ一室ニ彼ヲ訪ネテ行ッテミルト、ブクブク着フクレタ「トン」ハ 前ニ寝ブトンヲツミアゲテ、青イ顔ヲシテ、ソノツミアゲタ 布団ノ前ニ アグラヲカイテ、打伏スヤウニ寄りカカッテキルノデアル。何か声ヲカケルト 蚊ノ様ナ声デ何か云ヒナガラ 一方ノ手ヲ少シフルノデアル。コノ時ハ息苦シクテ何も言ッテ貰ヒ度クナク、何も答ヘタクナイノデアル。実ニ手モツケラレズ、アハレデアル。

サウシタ発作ノ来タ時ト、無事デ居ル時トハ、マルデ全ジ人ニ対シテ居ルノダトハ思ヘナイヤウデ、無事デ居ル「トン」ヲ相手ニシテキル時ハ マコトニ呑氣ニナレルノデアル。「トン」ハ南洋デハ ホントニ淋シカッタノダ。私以外ノモノトハ、笑顔トツマナナイ冗談以外ニハ 殆ド何も話サナカッタ。尤モ私ノ所ニ イツデモ ソロソロトヤッテ来タ熱帯生物ノ若い学者達、ソレカラ私ノ所ノ二階ニ居タ^{〔高松一樓〕} T トハ、自然ナ親シサヲ持ッテハ居タガ。

ブラット、ヤブケタ着物ヲヒキズッテ入ッテ来ル。

「何故私ハヒューヲ飲マイダラウ？」ト彼ハ 子供ノヤウナ可愛イイ声デ云フ。『きたかぜ』ノエスキモーノ真似デアル。ソシテ戸棚ヲアケテアルコール・ランプニ火ヲツケテ、小サナ^{キンカ}□□ヤカンヲカケルノデアル。ソレカラ又、私が帰ッテ来ルト、モウ「トン」ガ来テキテ 台所デ、コハレタカマドノ前ニ蹲マッテ 小サナ枯枝ヲクスブラシテキルノダ。

ヂキニ両手デアルミノ鍋ヲサゲテ室ニ戻ッテ来ルト、新聞紙ノ上ニ ボロボロト サツマイモノ皮ヲムキナガラ、フーフト息ヲ吹キカケナガラ、ソノイモ□□ヲ右手ニモチ、左手ニモチ、時々コロガシナガラ、口ノ方カライモニ近ヅケテ、ソレヲ^{〔欄外に記す〕} [ソノ熱イ芋ヲ] カザリ、今度ハ口ノ中ニ入ッタイモニ スースー ト息ヲ吸ヒコミナガラ、実ニアタフタト セカラシク芋ヲ食フノデアル。ダガ見テ居ルト イカニモウマサウデ、自分モソノ前ニ座リ込メ手ヲ出サズニハ居ラレナイ。コレハTガハヂメタノダガ、ソシテ殆ドTノ分担ノヤウニナッテキタノダガ、「トン」ハ 自分ニモ出来ル唯一ノ仕事トシテ、ソノTノ分担ノ中ニワリ込メ来タノデアル。ソノ頃 モウ町ニハ菓子ナド殆ド ナクナッテキタノデ、食堂以外ニ配給ノウケラレル サツマ芋ヲ、斯ウシテ利用スルコトニシタノダツタ。「トン」ハ時々 少シバカリノ サツマ芋ヲ モッテヤッテ来タ。ソレハ独身官舎ノ食堂カラ コソソリ持ッテ来ルノデ、私が私営ノ食堂カラ取ッテ来ル芋カラ思ッたら ホンノ僅カナモノデハアツタガ。ソレカラ一ヶ月ニ 十銭分□位ヒ食堂カラワケテ貰ヘル少シバカリノ砂糖モカカサズニ持ッテ来タ。パラオニ□新ラシイ「トン」ニハ、ソレ以上ハ ドウニモナラナカッタノダガ。「トン」ハマタ『今日モ代用食デ腹ノタシニナラン』ト云ッテハ ズボン ヲハキ シャツ ヲ着コンデ 街ノ南買ノ喫茶部マデバナナヲ食ヒニ出カケルノデアル。「トン」ハマタ、喘息ニハ 場所ガカハルト、ヒョットイイ時ガアルノダト云ッテ、発作ガハゲシクオコッタ時、ホンノ一町トモ ハナレテキナイ私ノ所ニ宿リニ来タコトモアツタ。ダガ、ドッチニシテモ、「トン」ノヒューヒュー^{〔欄外に記す〕}ハ□毎晩ノヤウニ オコッテ オサマラナカッタノデ、昼間来ナイ日ハ ヨイトシナケレバナラナイ程度ダツタノダ。

東京ニ引上ゲテモ「トン」ノヒューヒューハ少シモヨクハナラナカッタ。併シ半歳ノ上モ 別段悪クモナラナカッタ。「トン」ガ小サイ子供ヲ可愛イガル、ソノ可愛ガリ方ガマタ オカシカッタ。「トン」ガ呑氣ナノニ比ベテ 奥サンハ又、非常ニ謙譲ナ人デハアツタガ、超然トシタ「トン」ニハ 無クテハナラナイ、マメマメシイ世話女房ダツタ。ソシテ更ニヨク出来タコトニハ、ソノヤウニ丈夫サウナ人ダツタ。「トン」ヲ理解シテ居ル以上ニ、甘ヤカシテサヘ居ルカニ見エル位ダツタ。ソナニ 甘ヤカサレナケレバナラナイ程ノ「トン」ノ健康状態デモアツタノダガ。シカモ、ソナニ何一ツシナイデモ、考ヘナイデサヘヨイ、ユキトドイタ奥サンヲ持チ、ソノヤウナ境遇ニ、云ハバ呑氣ニ プカブカ浮ンデ居ルヤウナ屈託ナイ生活、位置モ「トン」ノ病氣ヲタメルコトハ出来ナカッタノダ。ソシテ十一月ニ入ッテ 私ガイヨイヨ南方ニ出ル為ニ ゴタゴタトシテキタ 或日 突然「トン」ハヒドイ発作、注射ト苦悶ノ一夜ノ後ニ、家ノ近くノ町医ノ病院ニ入院シタノダツタ。私が奥サンカラ教ヘラレテ病院ニ行ッタ時モ、「トン」ハフトンノ上ニ、フトンノ山ニヨリカッテ カナクシテ居タ。モウ一度 ヒドイ発作ガアレバ モウ駄目ダ トワカル様ナ状態ダツタ。「トン」ガナクナツタ時ノ、奥サンハ 実ニ ミジメダツタ。子供ヲ残シテ死ナレタ自分ヲ考ヘテ居ルノデハナイ。「光・風・夢」ガ本ニナッテ出、アチコチノ雑誌ニ「トン」ノモノガ出テ行クヤウニナッテキタ今、ソレヨリモ、既ニ遅スギタ彼ノ出発ニモマシテ、誰ガ見テモワカル未来ノ大キサヲ、奥サンハハッキリ知ッテ居タノダ。ソノ為ニ奥サンハ、自分ノ為デナク、「トン」ノ為ニ何トシテモ諦メキレナカッタノダ。奥サンガ一ニモ二ニモ、「トン」ノ為ニ、ト云フ時、ソレハ妻トシテノ立場以上ニ、ソナニ関係ヲ乗リコエテ、モット客観的ナモノヲハッキリト感ジラレタノデアル。

昭南ノ病院ニ居ル時ニ、奥サンカラノ最初ノ手紙ヲ貰ッタ。ソシテ葉書一枚シカ書ケナイ私ハ、ホントニ形式的ナ通リイッペンノ返事ヲ書イタマデ居ル。デ、イマダニ ソレニ就イテモ借金ガ残ッテキル様ナ氣ガシテ居ルノダガ。

この「日記」の文章を基に、未発表の回想文「トン」が書かれたのであるが、冒頭の部分が書き改められている外は、大きな違いはみられない。基の「日記」の“熱”は失われず、まとまりのあるよい文章である。

しかし、未発表原稿「トン」の最後の3行は、戦後に書かれたもので、香港で書かれた「日記」には見られない部分である。この3行は、昭和23年（1948）5月19日、中島たか子から手紙を受け取った日の「日記」（第48冊96・97頁）が基になっている。それは、次のようである。

19日、受信 中島たか子。

中島たかサンカラノ便リニハ、イツマデ待ッテモ ヨイ世ノ中ニハナッテコナイコト、最近 鶏ヲ飼ヒハジメタコト、部屋ノ中ニ、生レタバカリノ ヒヨコト寝起キシテ居ルコト、トリ屋ノオバサンニナッテ 玉子ヲ子供ニ食ベサセタイト、綿クズノヤウナ ヒヨコヲ遊バセテ居ルトキハ 苦勞ヲ忘レテ 楽シイモ書イテアツク。

コノ荒イ世ニ 子供ヲカカヘタ未亡人ノ生活ガドンナニ苦シク悲シイコトダラウト同情サレルト全時ニ、中島ガ生キテ居たら自分ニモドンナニヨイダラウニト、イツモナガラサウ思フ。

この「日記」の前半部が、「トン」の最後の3行になったのである。そして、久功は、「トン」を書いてから直ぐに、筑摩書房の編集者に渡したものと考えられる。

以上要約すれば、久功が「日記」の昭和18年（1943）11月8日の記と戦後の昭和23年（1948）5月19日の記を基に、未発表原稿の「トン」（『著作集』第6巻所収）を書いた。それを筑摩書房の編集者が半分近くまで縮めて、同じ題名で、「全集通信」に掲載したのである。

2. 「敦ちゃん」

ついで、角川書店版『昭和文学全集』第35巻月報に掲載された、「敦ちゃん」を見てみよう。

この回想文の中心になっているのは、帰国を前にして、久功と敦が二人でパラオ本島（ダベルダオブ島）を一周する旅について書かれているところである。

まず、昭和17年（1942）1月20日、ウギワル部落に泊まった時のエピソードが書かれている。

一つは、小さなリュックサックを背負って村はずれの道を歩いて行くと、芋田に行くらしい母と娘が、椰子の葉で編んだバスケットを抱えて向こうからやって来る。たちまち娘が大げさな表情で、久功にパラオ語で話しかけてくる。「そして二言三言冗談を言って別れて行く。すると敦ちゃんが、君、いまは何と言ったの、ときく。そしては、いいなあ、いいなあ、と言うのだった。」

もう一つは、村長の家に上がったとき、何か夕食のおかずがあるか、と聞くと、「ブラオム（腐り魚）だけなのです、私たち、この頃忙しいことが多いものですから。」「何だって？」と敦ちゃんがきく。「腐った魚ならあるってさ。」敦は、「そいつはいけな。君、それを食うの？」「ああ、うまいよ。」「いや、とてもいけない。」と言って顔をしかめる。

最後は、二人で椰子浜を散歩していたときのこと。久功が真白な砂の中にソコル貝が沢山あることを教え、食べられることを知ると、敦は、面白い、面白いと言って、砂浜を掘り続けた。そしてそれが味噌汁のみになって、敦の夕食の菜になった。

これらのエピソードは、旅行中の「日記」1月20日の記（『日記』V、440頁、443・444頁）に書かれている。久功は、「日記」に書かれている1月20日にウギワルを訪れた時の旅行記を基に、「敦ちゃん」を書いたのである。

3. 「パラオでのトンと私」

次に、文治堂版『中島敦全集』第1巻付録「ツシタラ4」に掲載された「パラオでのトンと私」を見てみよう。

この回想文の冒頭部分を引用する。

今、トンのことを何か書けと言われているのですが、十年前（昭和二十四年）筑摩書房から敦の全集が出た時、その後角川書店から出た昭和文学全集の三十五巻に中島敦集が入った時（昭和二十七年）にもトンの思い出を書きましたので、今となってはこれぞと云う新しいことを思い出すこともなくなってしまったようです。トンと私との交友は随分急速に深くなっていたのですが、何と云っても昭和十六年の夏から十七年二月までのパラオ（その間もトンの長い船旅の間がぬける訳です）と、それ以後の東京での数ヶ月と云う、まことに短い間のことですから、そうそう、あの時の、この時のトンと云うのが限りなくある訳ではなく、残念ながら前に書いたもので殆ど尽きているような気がするのです。

久功は、このように正直に書いている。この回想文を読むと、この記述の通り、目新しいところはほとんどない。特に末尾の部は、旅行記の1月29日の記に書かれている22行におよぶ長い詩を引用し、最後の3行も、旅日記を引用している。いかにも、書くことがなく、22行の詩を引用した、という感じがする。この「パラオでのトンと私」は、主として「トンちゃんとの旅」を基にして書かれたことが分かる。

それでも、いくつかは目新しいところもある。二番目の段落に、

今度第二巻にトンの書信が沢山収録されたのを読んで、そうだったのかと思ひあたるふしが多いのですが、第一に驚いた？ のは、あんなにもまめに通信しつづけ（そんなのにべつに手紙を出していたことすら知らなかったし気がつかないかつきです）思いつづけ、訴えつづけていた奥さんと子供たちのことを、平素私たちには何ひとつ話さなかったことです。別に隠していたわけではないでしょうが、そういうちょっとしたところで、でれやだったのですね。

とある。

『全集』に収められた敦の書信を初めて見た久功は、大変驚いた。内容もさることながら、その量に驚いた。

「日記」には、敦の逝去後、しばしば敦の思い出が書かれていたが、この頃になると、敦のことが書かれることは、ほとんどなくなった。

4. 「パラオでのトンちゃん」

「パラオでのトンちゃん」は、久功の生前に公表された四編の回想文のうち、最後に書かれたものである。そのため、ほとんどがそれまでに書かれたものと同じ内容である。ただ、その文章の最後に、

さて、トンの「南島譚」の中の「マリヤン」に出てくる氏を私のことだと言う人があるが、そんなふうに見える人があるなら、是非トンにたしかめてもらいたい。

と書かれているのが、注目される。とうに死去している敦に、“確かめてもらいたい“、というのは、一体どうしたことだろうか。それについて、安川定男氏は、「そこには、全部を事実ととられては迷惑だ、というのに近い口吻が感じられる。」と述べている⁽¹²⁾。

では、この回想文が書かれた当時の久功が置かれていた状況について、簡単に見てみたい。昭和39年（1964）3月31日から6月18日までの「日記」（第88冊、31、42、48、79、131頁）から、この回想文執筆に関わる箇所を抜粋してみた。

[3月]

31日 火

受信 夜、筑摩書房ヨリ口速達、現代文学大系ノ「梶井、堀、中島」集ノ月報原稿依頼

[4月]

2日 木

発信 筑摩書房（川口澄子）速達

10日 金

受信 筑摩書房（川口澄子）

14日 火

発信 川口澄子（筑摩書房 月報原稿）速達

28日 火

発信 川口澄子

[5月]

13日 水

受信 筑摩書房（現金書留）

15日 金

発信 筑摩書房

[6月]

18日 木

受信 筑摩書房（現代文学大系35、梶井基次郎、堀辰雄、中島敦集）

発信 川口澄子（筑摩）。

まず、3月31日の夜、筑摩書房から月報の原稿執筆依頼を速達で受け取る。その2日後、筑摩書房の編集者に受諾する旨の返事を速達で送る。そして12日後の14日に、月報の原稿を筑摩書房へ送る。記述は実に簡潔である。原稿の依頼を受けてから原稿を送るまでの間、「日記」には回想文執筆に関することが全く見られない。他の細々した事が記されているにもかかわらず。これは、久功がこの回想文を書くことに、ほとんど関心を持っていなかったことの表れでなかろうか。

既に述べたように、この10年前に書かれた「パラオでのトンと私」では、もう新たに書くことはない、と述べている。そこには、頼まれたから書いた、という態度が透けて見える。そして、その10年後は、更に書くことは無くなった。

久功にとって、この回想文を書いたとき、心身ともに、あまり良い状態だったとは言えない。原稿の依頼を受ける直前の3月24日から30日まで、秋山画廊で個展を開いていた。それなりに盛況ではあったが、個展の最終日に、久功は次のように「日記」（1964年3月30日、第88冊、30・31頁）に書いている。

マルマル1週間ワ ナカナカ長カッタ。5年プリノ展覧会ダツタガ、ソレモ新作発表展デワナクテ、小回顧展ダツタ。ズルズルト5年モノ間 何モシナカッタノワ、1ツニモ、モオヤタラト 画廊ガフエテ、ヤタラト個展、2人展、3人展 グループ展ト展覧会ガ下町ニアフレシマツタカラデモアルガ、今度ワマタ ヴィナス展トブツカッテシマツテ、朝日新聞ワ、テンテコ舞イデモアリ、外モ新聞社ワ マルデ来テモクレナイ……多分ソオイトニナツタノダロオ。

アカハタガ来、芸新ガ来、手帖、みづゑガ来ワ来タガ。一番ガンバッテクレタノガ小原流サンダツタノガ皮肉。

「日記」の記述には、理解できないところがあるものの、久功は、この個展の結果には、大分不満だったことが分かる。久功は、個展会場に毎日顔を出し、大勢の人々に対する接客で、疲労も積み重なったであろう。月報の原稿依頼を受けたのは、その翌日である。さらに良くないのは、その翌日は、4月1日、月初めである。久功の妻・敬子は開業医であった。毎月の月初め、久功は、健康保険の書類作りを手伝っていた。その間は、外出も出来ず、集中して原稿を書くこともできない。4月2日の「日記」（第88冊、35頁）には、「相変ラズノ月始メ。」と記されていて、うんざりしている様子が分かる。4日の「日記」（同、37頁）には、「今月ワ敬子ガ忙シイ上、書類ガ面倒ナノガ多クテ、マダマダ、ナカナカ片付カナイ。」と記されている。6日になって、健康保険の書類作成から解放され、やっと外出できた。夕方、秋山画廊へ行き、画廊主の秋山をはじめ、皆に個展の礼を言ってくる。8日には、ミロのヴィーナス展のオープニングの招待状が来ていたので、国立西洋美術館へ出かける。松方三郎をはじめ、多くの知り合いに会い、雑談する。

既に述べたように、14日に筑摩書房へ原稿を送るまで、「日記」には、月報原稿の執筆について、何も書かれていない。つまり、ほとんど関心がない、という事ではなかろうか。3月31日の「日記」の最後（同前、33頁）に、次のような詩が書かれている。

男アリ

空虚ナル心抱キテ

空虚ナル言動ニ飽キテ

○

男アリ 狐（キツ）ニ 憑カレテ

泥田ノ中、這イズリマワル

ミジメサニ 泣カユ

この詩は、その時の久功の気持ちをよく表している。

もとに戻って、久功が、どうして「マリヤン」に出てくる氏は自分ではない、という、直ぐに分かってしまうような嘘を書いたのかについて考えたい。それは、恐らく当時の久功の身体的、精神的状態によるものでなかろうか。63歳となり、体力、気力も衰えている。しかも、久功はその7年前に、胃潰瘍の大きな手術をしている。ときに精神状態が不安定になることもあろう。それにより、久功は、少し“投げやり”になって、月報の原稿の最後にあのようなことを書いたのではなかろうか⁽¹³⁾。

その前兆は、既に3年半前にあった。昭和35年（1960）12月10日の「日記」（第80冊189頁）に、次のように書いている。

NHKノ坪倉サント云ウ人カラ電話デ、テレビ デ中島夫人ヲ ゲストトシテ、敦ノ思い出ノオナモノヲ出スコトニナツク ソオ
デ、何か、テレビ デ見セラレルヨオナモノデ、敦ニユカリノアルモノヲ持ッテイナイダロオカ ト言ッテクル。ソナモノナイ。

たとえ「日記」の中でとは言え、「ソナモノナイ」とは、実にぶっきらぼうな言い方で、久功は、これまでこのような一少
なくとも、敦に関しては一表現はしなかった。久功の中で、何か変化があったのであろう。

5. 「トンちゃんとの旅」

昭和17年（1942）1月17日から31日まで、久功は敦と二人でパラオ本島（ダベルダオブ島）一周の旅をした。敦は妻宛の
出発日付けの手紙で、「今から出張旅行に出る。今度は土方さんと一緒だから楽しい。大体二週間の予定で、月末に帰って来る。
充分に島民の生活を見てくる積り。」と書いているように、この旅行を大いに期待していた。

「トンちゃんとの旅」は、その旅行記を日記体で書いたもので、かなりの長文である。その基となった「日記」第30冊は、1
月17日から始まっている（ただし、表紙には、「二・一六ヨリ」と記されている。1月16日は欠けている）。「日記」の旅行記は、
第30冊の冒頭と2月16日から28日までの間に、分割されて挿入されている。ただ、「日記」では旅行途中の1月22日の半ばま
でしか書かれていない。31日までの旅行記を含め、1月22日の後半から2月15日までの24日分の「日記」が欠けているのである。

旅行記が「日記」を基にして書かれているので、24日間「日記」を書かなかったことは考えられない。別の「ノート」など
に書いたと思われるが、それを「日記」に1月22日までしか書き写さなかった。恐らくは、日本へ帰国したので、「日記」に書き
写す余裕がなかったからであろう。久功は、1月23日以後の旅行記を「日記」に書き写すことなく、「トンちゃんとの旅」を書い
たのではなからうか。今日では、未発表の旅行記1月23日から31日までの原稿が残されているだけなので、たいへん貴重な資
料だと言える。なお、既に述べたように、『同時代』34号（1979年8月）と「パラオ——ふたつの人生」展図録（世田谷美術
館、2007年11月）、に「敦ちゃんとの旅」の抄録が収められている。

未発表原稿の「トンちゃんとの旅」と「日記」に収められている旅行記とを比べると、前者が、中島敦のことを全て「トンちゃ
ん」と記しているのに対し、後者では、中島敦のことを、「中島君」と記したところと、「敦ちゃん」と記したところが混在している。
「日記」の旅行記が残っている1月17日から22日の半ばまでを見ると、1月17日は、「中島君」が7カ所で、「敦ちゃん」は見ら
れない。19日は、「敦ちゃん」のみ2カ所。20日は、「中島君」が3カ所、「敦ちゃん」は7カ所である。21日は、「中島君」が
5カ所、「敦ちゃん」が7カ所、22日は、「敦ちゃん」だけ1カ所である。このように、久功自身、中島敦の呼び方を統一してい
ない。恐らく、実際にも、「中島君」と呼んだり、「敦ちゃん」と呼んだりしていたのだろう。

敦と出会ってから、久功は、初めから敦のことを「敦ちゃん」あるいは「トン」と呼んでいたわけではなかった。「日記」では、
初めのうちは「中島敦」あるいは、「中島君」と記されている。親しくなってから、「日記」には、「敦ちゃん」、「トン」と記され
るようになった。「日記」の旅行記では、両方が混在しているが、この旅行以降、「日記」には、「敦ちゃん」と記されるよう
になる。日本へ帰る船の中でも、帰国後も、「敦ちゃん」と記されている。しかし、死去の数カ月前、8月以降になると、1回を除き、
「中島」、「中島君（敦）」、「中島（敦）」と記されている。この変化をどのように考えたらよいのか。

この時、久功は、後に『流木』として刊行される著書の原稿を敦に預け、読んで貰い、助言を得ていた。敦は、親しい年
下の友人ではあったが、この時には、久功の“師”であった。それで、敬意をこめて、「敦ちゃん」でなく、「中島君（敦）」と記
したのではなからうか。回想文「敦ちゃん」には、「南洋では私が大先輩だったが、日本に帰って来ては、敦ちゃんの方が私
の大先生になってくれるはずだった」と記している。

結び

土方久功が中島敦について書いた6つの回想文について述べたが、ここで明らかにしたのは、

- 1、未発表原稿の「トン」は戦中に書かれた「日記」昭和18年（1943）11月8日の記と、戦後の「日記」昭和23年（1948）
5月19日の記を基に書かれたものである。筑摩書房の『中島敦全集』第3巻付録「中島敦全集通信」第3号掲載の「トン」
は、筑摩書房の編集者が未発表原稿の「トン」を半分近くまで縮めたものである。
- 2、「敦ちゃん」は、パラオ本島旅行中の「日記」1月20日の記を基に書かれたものである。
- 3、「パラオでのトンと私」は、「トンちゃんとの旅」を基にして書かれ、それに『全集』第2巻に収められた敦の書信に対する感
想を書き加えたものである。
- 4、「パラオでのトンちゃん」は、それまでに書かれた回想文と内容はほぼ同じであるが、最後の3行の「マリヤン」に出てくる氏は、

自分ではない、と否定している部分は、これまでに書かれた事がないものである。恐らく、63歳となった久功の不安定な精神状態のもとで書かれたからではないかと考えられる。

- 5、「トンちゃんとの旅」は、「日記」に書かれた旅行記を基にして書かれたものであり、「日記」が残っていない1月22日の後半から2月15日までの24日分は、特に資料として重要である。

これまでも、小稿で述べた回想文を使用した研究は数多く見られる。しかし、それがどのように書かれたものかを論じたものはない。これを知ることにより、これら回想文の理解がより深まるものとする。

【註】

- (1) 国立民族学博物館所蔵。『土方久功日記』は、全部で122冊あり、そのうち第1冊から第31冊まで、5巻が同博物館から刊行されている。
- (2) 拙著『土方久功正伝』（東宣出版、2016年12月）、拙稿「中島敦『南島譚』とその素材としての「土方久功日記」」（『跡見学園女子大学文学部紀要』第52号、2017年3月）
- (3) 筑摩書房版『中島敦全集』第3巻付録「中島敦全集通信」第3号、(昭和24年（1949）6月）。後、『中島敦研究』（筑摩書房、昭和53年（1978）、世田谷美術館「パラオ——ふたつの人生」展図録（平成19年（2007）、収載）
- (4) 角川書店版『昭和文学全集』第35巻月報（昭和29年（1954）4月）、後、『土方久功著作集』第6巻、三一書房、1991年、収載）
- (5) 文治堂版『中島敦全集』第1巻付録「ツシタラ4」（昭和35年（1960）11月、（後、前掲『中島敦研究』、『土方久功著作集』第6巻、収載）
- (6) 筑摩書房版『現代日本文学大系』第35巻月報（昭和39年（1964）6月）。後、『現代日本文学大系』第34巻月報33、(昭和51年（1976）9月)、に収載
- (7) 未発表原稿、前掲『著作集』第6巻収載
- (8) 未発表原稿、同上。なお、『同時代』第34号（1979年8月）、および前掲、「パラオ——ふたつの人生」展図録に抜粋が収められている。
- (9) 岡谷公二氏は、この「トン」について、「これは久功の死後、『土方久功著作集』第六巻に収録されて、はじめて日の目を見た」（『南海漂蕩』、142頁、富山房インターナショナル、2007年11月）と述べている。
- (10) 前掲、『土方久功正伝』19・20頁
- (11) 岡谷氏は、「胃潰瘍のため香港の病院に入院していた、昭和十八年十一月の日記の一節だけに、ここに記されている思いは、彼の真情とっていい。」（前掲、142頁）と述べている。
- (12) 「土方久功と中島敦」（『同時代』34号、1979年8月）155頁
- (13) 川村湊氏は、この文言について、「このやや気色ばんだいいかたは、「マリヤン」の「オヤ、この土俗学者先生、中々油断がならないな」という箇所に敏感に反応したものと思われる。現地のカナカ女性をもてあそぶ日本人男性。結婚をしても、子供ができるとその子を母親に押しつけたまま日本へ帰ってしまう「あてにならない」内地の男たち。土方久功はそうした「日本人」といっしょにされることを嫌ったのであり、それだけ彼は南洋群島そのものに溶け込んでいたのである。」（『大東亜民俗学』の虚実』、195頁、1996年）と述べているが、それは正確ではなかろう。この文言は先行の回想文には見られず、この回想文にのみ見られる。「敏感に反応した」のであれば、それを先行する回想文に書いたであろう。